

ヘミングウェイとハメット、二人のハードボイルド作家

Hemingway and Hammett: The Two Hardboiled Writers

坂本季詩雄
Kishio SAKAMOTO

SUBSCRIPT: “Hardboiled” is an adjective for the style of Earnest Hemingway and Dashiell Hammett. Rarely have critiques these days said that their styles are similar because Hemingway is a Nobel Prize winner and is supposed to be a greater artist, who has been influenced by eminent modernists such as Gertrude Stein and Ezra Pound, than Hammett, who is just a detective story writer from a pulp magazine for the lowbrow. Both of them, however, definitely shared the same Zeitgeist after World War I, which led to a nihilistic resignation to the destroyed identity and the consequential isolation from the community. Their “hardboiled” style could unexpectedly be born from the same root in the different places, Paris and San Francisco in the 1920s

はじめに

アーネスト・ヘミングウェイ Earnest Hemingway (1899-1961年) とダーシール・ハメット Dashiell Hammett (1894-1961年) は、アメリカの小説家として共に有名である。前者はノーベル賞を1954年に授与された、ハイブラウな読者を持つ作家であり、代表作は初期の短編小説、『我らの時代に』 *In Our Time* (1925年) と『日はまた昇る』 *The Sun Also Rises* (1926年) に始まり、『誰がために鐘は鳴る』 *For Whom the Bell Tolls* (1940年) 『老人と海』 *Old Man and Sea* (1952年) などがあがる。作家自身の持つ魅力もあり、1999年には生誕100周年ということもあり写真集が出されるほど、人物として被写体として商品価値もいまだに備えている。後者はバルブフィクション『ブラック・マスク』誌に、1922年に掲載された探偵小説を皮切りに、多数の作品を寄稿し、探偵小説家として人気を博す。低級な

読者向けに作品を掲載することから作家人生を始めた。長編小説では『赤い収穫』 *Red Harvest* (1929年)、『マルタの鷹』 *The Maltese Falcon* (1930年)、『影なき男』 *The Thin Man* (1934年) などがある。

一方はハイカルチャー向けの作家、他方はポピュラー・カルチャー向けの作家である点を考えると、二人の文体を言い表すときに共通に使われる「ハードボイルド」という形容詞は、その内包する意味が全く異なると考えられている。本論では同時代に生きた二人の作家に通底する意識があり、そこからこの特徴ある文体が生まれた可能性を考える。

本論にはいる前に、「ハードボイルド」の語源と現在の意味について確認しておく。この言葉の語源は、1886年の講演で「わけ知り顔の」という意味でつかったマーク・トウェインにさかのぼる。

19世紀末頃には、うち負かしがたい奴、喰えない奴、御しがたい奴、人に同情を求めたり、期待したりせず、情けもかけず、情けを押しつけられることもない強情で抜け目のない、めはしのきくなどという意味であった。1915年頃には金にけちなという意味になるが、第一次大戦中、教練担当の軍曹などを

この論文執筆には、愛知工業大学より1999年度重点配分予算の援助を受けた。

形容する、非感傷的な、冷笑的な、他人の感情や意見に無関心なという現在の意味に解されるようになった。

ヘミングウェイとハメットの共通点と相違点

アーネスト・ヘミングウェイは1899年、シカゴ郊外のオークパークで、開業医の父と音楽家の母の間に生まれた。父クラレンスは苦学して医学部を終えて開業し、謹言実直で子供達には厳格に接した。アウトドア・ライフを好み狩猟や釣り、自然を愛した。母グレイスはオペラ歌手志望だったがかなわず、後に絵の才能を発揮する。お嬢様育ちだったため家事はまるでだめだったという。そういう二人から野外での冒険を志向し、芸術を愛する才能を受け継いだのが長男のアーネストであった。

一方サミュエル・ハメットは1894年、メリーランド州南部のポトマック川とタクセント川の交わるセント・メリーズ群で生まれる。農夫の家系の父リチャードは地元の治安判事を一時していたが、支持政党を民主党から共和党へと変節すると、地元民から裏切り者とみなされ追い出された。一家はフィラデルフィアへ、のちボルチモアへ移る。父は飲酒癖があり女道楽が絶えない無軌道な男であった。水夫の家系の母アンはフランス系の祖先を持ち、姓をドゥ・シールといい、後にハメットのペンネーム、ダシールの由来となる。教養を重んじる高潔で誇り高い女性だったが、ときおり肺結核の発作に襲われた。サミュエル・ハメットは飲酒癖と女漁りと肺結核と読書への情熱を二人から受け継ぐ。

ヘミングウェイが高校を卒業する1917年には、欧州で第一次世界大戦が戦われていた。兵士として参戦したかったが、親からは反対され、視力も悪かったため徴兵検査に失格してしまう。大学への進学は性に合わないと考えた彼は、カンザスの新聞社『カンザス・シティー・スター』で見習いを始める。記者として修行するうち、イタリア赤十字が志願兵を募っていると知ると、志願してヨーロッパ戦線に向かった。つかんだ仕事は最前線の兵士に手紙やチョコレートなどを配達する任務だった。

暴力と死を戦場で経験しマッチョな男、英雄になりたいと願ったヘミングウェイは、最前線でまもなく瀕死の重傷を負う。自転車を下りて塹壕の後ろへ来たとき、至近距離で迫撃砲が炸裂し、眼前の兵士

は即死し、彼自身も脚に重傷を負い気絶。気がついて負傷兵を担いで塹壕へ向かうも、再び脚に被弾し塹壕へ転げ落ち、命があることを確認し再度気絶する。負傷兵を助けるところを目撃されたことで、イタリア軍から勲章を貰うことになる。結局彼の第一次大戦での戦闘経験はこれだけに終わり、入院後休戦となりアメリカへ帰国する。

ハメットは一家が経済的に困窮したため、7歳で新聞配達をして家計を助ける。1908年、14歳の時に父が病気で倒れ働けなくなると、実業高校を中退しボルチモア・オハイオ鉄道でメッセンジャーとして働く。その後7年間、貨物係、荷役人足、雑役夫、広告代理店の雑用係など職を転々とする。そのなかで当時の若者らしく男らしさを表現するべく、1918年にアメリカ陸軍補給連隊の新兵となる。救護自動車小隊に配属されるが、結核を患い入院を繰り返す、1919年兵役不適格者と判断され、月額40ドルの恩給付きで除隊処分となる。

多くの男達は第一次大戦までは、戦争へある種の牧歌的な考えを抱いていた。

シャルマーニュ（西ローマ帝国皇帝。742-814年）の時代から1914年までおよそ千年ばかりの間、キリスト教世界での戦争は、・・・一つの連続する伝統という面から意識され、賛美されてきた。そしてその伝統に生きる人びとは、少なくとも、いくつかの戦争は正当であるばかりでなく神聖なものであると考えて疑わなかったし、それと全く同じように、そうした戦いで死ぬことは甘受すべき運命であるばかりか栄光に満ちた出来事であると考えていた。¹

戦車、航空機、機関銃、毒ガスなど近代兵器を導入した戦争において、多くの兵士は上のようなことが幻想に過ぎないことを実感せずにいらなかった。戦闘では誰ともしれぬ敵を殺し、殺され、戦争にあるべき信義などはかけらも無かった。戦闘に参加した男達は肉体に傷を負ったばかりか、強度の精神的恐怖のため、心に深い傷を負うことになる。

戦闘に参加したヘミングウェイは、男らしさを実感できず、被弾の恐怖を長年振り払うこともできず、自分の女々しさを思い知った。

被弾体験の後遺症としか言いようのない「死の恐

怖」に絶えず捉えられていたために、彼は基本的には10年以上にも亘って自己の被弾体験とそれが喚起する表象としての戦争、つまり、生、死、喪失、暴力、勇気、恐怖、友情、恋愛、別離といったメタファーとしての戦争の呪縛から逃れられないでいたのだ。²

この戦争後、スペイン独立戦争（1936-39年）や第二次世界大戦（1939-45年）などに赴き、危険や死や暴力へ身をさらし、それぞれの戦争についての記事を寄稿し、男らしさを誇示しようとする。しかし彼の行動は、安全なところに身を置いた観察者として、自己へではなく、他者に降りかかる死を眺めていたに過ぎなかった。

ハメットも自分を含めた男達の女々しさについて自覚していたことが、ガートルード・スタインとの会食の折り、彼女の日記に書き留められている。

19世紀の男の作家はいろいろな種類の男をたくさん発明しました。一方女の作家は女を発明できずにいつも自分たちを華麗にとか、悲しくとか、ヒロインらしくとか、美しくとか、絶望的だとか、やさしく見せようとかしたけど違う種類の女は作り出せませんでした。・・・さて20世紀になって男がそれをするの。男は自分たちのことを強いとか、弱いとか、神秘的だとか、情熱的だとか、酔っぱらいだとか、抑制心があるとかやっているけどこれぜんぶ19世紀に女がやったことで、自分のこと書いてるわけですよ。そして今あなたもしてんじゃないですか、どうしてなの。彼は、それはかんたん。19世紀には男は自信があって、女はなかったけれど、20世紀になると男が自信がなくなったからあなたがおっしゃるように自分をもっときれいにとかもっと魅力的にとかぜんぶもっとももっととやるわけです、自信がないから自分にしがみついて違うタイプの男が作り出せないのです。³

アメリカ社会では29年の世界恐慌以来、飢えと失業は深刻さを増し、デモヤストが各地で頻発した。その状況下で、政治と文学は連携を深めていった。左翼系の雑誌『パーティザン・レビュー』を中心にプロレタリア文学が主流となっていく。この30年代から、ハメットは政治活動に身を投じた。ア

メリカ作家同盟とシナリオ作家組合の両団体に指導的役割を期待されたハメットは、共産党員としてスペイン内戦への参加を望んでいた。第一次大戦へ参加できなかったことが、彼を苦しめ続けていたのだ。⁴

当時スペイン内戦において、フランコの率いるファシスト勢力をスペインで阻止できれば、ヨーロッパでの新たな戦争へ向かう事態を回避できると考える知識人がアメリカに増えていた。ハメットやヘミングウェイを含むアメリカの著名な人々は、中立政策をとり続けるアメリカ政府に、反フランコ勢力を支持するように圧力をかけていたのだ。

このときヘミングウェイと異なり、スペインでの戦争に赴くことができなかったハメットは、第二次大戦時の1942年アメリカ陸軍に入隊し、一年以上軍務に服した。戦争への思いがファシスト帝国主義の広まりを阻止したい、という共産主義者としての信条によるものであったことは確かだろう。しかし当時すでに46歳で、肺を病み、長年の飲酒癖と梅毒感染していた彼がこれほどまでに軍務に服することをこだわったのは、男らしさを発揮できる場を求めてのことだったと考えられる。さらに第一次大戦時も、結核にかかったことで除隊せざるを得なかったのだが、健康上の不安は生涯つきまとった。彼の無軌道な生き方の裏には、いつ死んでもおかしくないと言う諦めの気持ちがあったと考えられている。

様々な違いはあっても、この二人の作家はほぼ同時代の若者として、第一次大戦に由来する男らしさを喪失した経験を持ち、それを長くトラウマとして持ち続け、さらに死を身近に感じていたという共通点を持つことがわかる。

ハイカルチャーとヘミングウェイ

第一次大戦後の1920年代には、多くのアメリカの若者はバリーで戦争によってアイデンティティや価値観をうち砕かれた「失われた世代」として、新たな価値観を探し求めていた。元来多くのアメリカ作家は欧州に文化的刺激を求めてきた。ベンジャミン・フランクリンが『自伝』を書いたのはフランス滞在中だったし、アーヴィング・クーパー、ロングフェロウ、エマソン、メルヴィル、ホーソン、トウエインなど、アメリカ古典作家達も欧州へやって

きて刺激を受け、それを創作の力とした。その伝統はヘンリー・ジェイズを経て、20年代のバリに集まったフィッツジェラルド、シャーウッド・アンダーソン、ヘミングウェイ、ドス・パソス、フォークナーなどへ伝播した。

バリへやってきたヘミングウェイは、アンダーソンの紹介状を持って、作家になるためのアドバイスをもらおうと、後期印象派の絵画のコレクターで、前衛的芸術の庇護者の存在だったガートルード・スタインをおそるおそる訪ねた。

ヘミングウェイは新聞記者見習いの時、「単文を使い。最初のパラグラフは短くせよ。活きのよい英語を用いよ。否定的でなく肯定的に言え。陳腐な俗語は使うな。余計な語はすべて削れ。形容詞を避けよ。ことに大げさなものを。ifは『もしも』、『かどうか』ならwhetherにせよ。」という文体マニュアルを授けられていた。そのヘミングウェイが、キュビズムの実験を文学へ持ち込もうとしていたスタインから学んだことは、反復と省略によるドライで客観的で男性的なスタイルだった。⁵

さらに彼はエズラ・パウンドにも近づく。1933年にヘミングウェイは、どうすれば良い作品をかけるのか、どうすれば作品が悪くなるのかを学んだと言っている。⁶パウンドから学んだことは、1913年に発表されたイマジストの信条の格子であろう。それはつぎのようなものだった。

1. 主観・客観を問わず、「物」をじかに扱うこと。
2. 表現に役立たない言葉を決して使わないこと。
3. リズムに関して。メトロノームにたよらないで、音楽のフレーズにしたがって詩を書くこと。

またパウンドはイメージについて、「イマジズムの要点は、イメージを『装飾』につかわないことである。イメージ自体が言葉なのだ。イメージは形成された言語を越えた言葉である」とも述べる。⁷

二人のモダニストと交流してヘミングウェイが身につけた文体は、初期の短編小説の中に見られる。つぎの文章は『我らの時代』に含まれる、『二心ある大川 その一』*Big Two-Hearted River: II*からである。

He (Nick) took out his knife, opened it and stuck it in the log. Then he pulled up the sack, reached into it and brought out one of the trout. Holding him near the tail, hard to hold, alive, in his hand, he whacked him against the log. The trout quivered, rigid. Nick laid him on the log in the shade and broke the neck of the other fish the same way. He laid them side by side on the log. They were fine trout.

Nick cleaned them, slitting them from the vent to the tip of the jaw. All the insides and the gills and tongue came out in one piece. They were both males; long gray-white strips of milt, smooth and clean. All the insides clean and compact, coming out all together. Nick tossed the offall ashore for the minks to find.⁸

この文章を読むと反復される言葉、log、laid、trout、all、sideと省略による簡潔な表現、“Holding him near the tail, hard to hold, alive, in his hand”や“The trout quivered, rigid.”が見られる。シンタックスも省かれ息の短い語句が続いている。声を出して読むと、頭韻/h/ /c/音の連続がリズム感を加えている。また三人称で客観的に語られ硬質な感じと、伝わるイメージがそのまま、ニックの行動を感情を交えず読者の心へ直に届かせるように思える。魚を解体する行為には人間的感情が感じられず、機械的、無機質なニックの心持ちの反映が、形容詞や副詞を使うことなく表現されている。「コミュニケーションが失われた世界において、もっとも沈黙に近く、沈黙と等価物である最小限の言葉だけが、ある種の現実を与えてくれるのに似ている」とフィードラーはヘミングウェイの文体を表している。⁹

このようにヘミングウェイの文体は、アカデミックでハイブライウな環境から生み出された。それと同時にこの文体が表すのは、アメリカ社会、制度、人間関係においても有機的な繋がりをもてなくなった時代の雰囲気でもある。これを批評家たちはある時、ハードボイルドな文体と呼ぶようになる。

ポピュラー・カルチャーとハメット

ハメットは結婚後、サンフランシスコに住み始め、健康状態が悪化し、探偵の任に堪えられなくなると、物書きを生業とし始めた。1922年にハ

ヘミングウェイとハメット、二人のハードボイルド作家

メットの初めての小説が雑誌に掲載された。その雑誌はH. L. Menckenの高級文学誌 *The Smart Set* であり、フィッツジェラルドが学生時代作品を寄せたことが機となり、プロの作家として巣立ったこともある雑誌である。ハメットの作家としての出発はハイブ라운な雑誌であったが、その後生活費を稼ぐためあらゆる雑誌にあわせた原稿を投稿するようになる。

文学者H. L. Mencken、劇評家George Gene Nathanはエリート向けに『スマート・セット』を発行し、高い評価を受け、F. Scott Fitzgerald を世に送り出したこともあったが、金を稼ぐことはできず、1918年にはどうしようもない財政状態に陥る。『スマート・セット』廃刊の危機に直面したメンケン は、パートナーのNathanと手取り早く資金を得るために、「探偵、ミステリー、冒険、ロマンス、降霊術の絵入り雑誌」と副題をつけたパルプ・マガジン『ブラック・マスク』を、一冊20セントで21年に創刊する。ハメットが自分の探偵としての経験をもとに、作家として稿料を得て食べていけるようになったのは、この大衆雑誌に探偵小説を投稿したことがきっかけだった。

アメリカでの大衆雑誌の歴史は、*ダイム・ノベルズ*にはじまる。*ダイム・ノベルズ*の起源は、1840年頃の産業革命により大衆に与えられた、より長い余暇時間を埋め合わせるため、楽しみと興奮をもたらす娯楽雑誌にさかのぼる。*ダイム・ノベルズ*は1860年には開拓時代のアイコンであるBuffalo BillやKit Carsonなど、19世紀のヒーローたちをとりあげた。¹⁰

世紀の変わり目には*ダイム・ノベルズ*は衰え、つぎに台頭したのがパルプ・マガジンであった。縦十インチ、横七インチほどで、けばけばしい表紙と、120ページのウッドパルプでできた雑誌である。パルプ・マガジンは二つの大戦の間、経済恐慌時に栄えた。第一次大戦末には、パルプマガジンの数は20誌以下だったが、30年代の半ばには200種に上るパルプマガジンをニューススタンドで手に入れることができた。その種類は、陸や海の冒険談、西部小説、SF、探偵小説、恋愛ものなどがあつた。

探偵雑誌のなかでもっとも有力だったのが、『ブラック・マスク』誌であった。創刊当時は、そのころ英米で人気のあつた、上品な謎解き小説が主力

だったが、やがて20年代に始まるライフスタイルの変化が紙面に反映されるようになった。ライフスタイルの変化とは、文化の大衆化により高校、大学への進学率が大きく上昇し、自動車の大量生産や通信販売網が確立し流通網整備が行われたことで大量生産、大量消費の時代が到来し、性道徳が開放的になり、プロスポーツ観戦が盛んになり、様々な芸能ジャンルにスターが登場したことに起因する。第一次大戦により、従来堅固と思われてきた社会制度、正義感、悪と善の区別などが雲散霧消してしまったことが、人々がこのような新たなライフスタイルを求める原因ともなっていた。こういったことが探偵小説の紙面に反映された結果、ロマンティズムと混じり合った幻滅感、シニシズム、現実からの離脱、そして行動への衝動などが優位を占めるようになったのだ。

ハメットは自らの「ハードボイルド」な文体では、アメリカ口語や犯罪社会のスラング、あるいは犯罪に関わるような人間なら話しそうな言葉を自由に駆使し、登場人物にありのままにしゃべらせた。三人称一視点の手法により、すべての場面を主人公サミュエル・スベードに向けられたカメラ・アイとテープレコーダーによって記録されているかのような記述法で、心情は客観的に描写される。粗野なほど力強い文体と、市井の私立探偵の目を介して鋭く見据えられた、1920年代末のアメリカの現実の二点がハメットのスタイルの特色といえるだろう。Raymond Chandlerが指摘するように、それまでにはなかった作品世界をアメリカ語により作り上げたのだ。¹¹

ハメットは20年代のパルプ小説、で『ブラック・マスク』誌に掲載された初の短編集で、自分の創作する探偵の行動原則を箇条書きしている。「任務貫徹、私情を挟まない、人の助けを拒む、金で裏切らない、不屈の精神力を持つ、事実は自分にしか属さないと決めている。」¹²野崎六助はこういった行動をとる人物の原型を、パイロンのように昔から語り継がれてきたヒーロー像求めている。

かれは過去の秘密を王様のガウンのように身につけたまま歩きまわり、孤独で、寡黙で、近づき難く、呪いと破滅の気配を周囲にまき散らす。自分に対して容赦なく、他に対しても無慈悲である。

このような原則はピンカートン社での探偵時代に身につけたものである。ハメットは兵役につく3年前、1915年にありついた仕事がピンカートン探偵社での探偵稼業であった。「我々は眠らない」というモットーを持つこの会社は、19世紀中頃警察組織が整備されていなかったアメリカに、アラン・ピンカートンが設立した探偵社で、全国的な調査網をもち、犯罪の真相を解明し防止することを信条としていた。

ここでハメットをいっばしの探偵に鍛え上げたのは、ジェイムズ・ライトというボルチモア支社の副社長を務める男であった。このずんぐりした小男は、大胆不敵で優れた技術を持ち、ハメットが入社する頃すでに伝説の探偵であった。後にハメットが小説の主人公として描く、コンティネンタル・オブのモデルとなるこの男と探偵としての自らの経験から上のような信条を身につけたのだ。¹⁴

こうして生まれたのが、つぎにあげるような一節である。

A telephone-bell rang in darkness. When it had rung three times bed-springs creaked, fingers fumbled on wood, something small and hard thudded on a carpeted floor, the springs creaked again, and a man's voice said:

"Hello. ... Yes, speaking. ... Dead? ... Yes. ... Fifteen minutes. Thanks."

A switch clicked and a white bowl hung on three gilded chains from the ceiling's center filled the room with light. Spade, bare footed in green and white checked pajamas, sat on the side of his bed. He scowled at the telephone on the table while his hands took from beside it a packet of brown papers and a sack of Bull Durham tobacco.

Cold stream air blew in through two open windows, bringing with it half a dozen times a minute the Alcatraz foghorn's dull moaning. A tinny alarm-clock, insecurely mounted on a corner of Duke's Celebrated Criminal Cases of America—face down on the table—held its hands at five minutes past two.¹⁵

上であげた特徴の他に、形容詞、副詞をほとんど用いていないことと、表現の簡略化による話の運びが

非常に早いことがわかる。

ヘミングウェイとハメットの「ハードボイルド」

ヘミングウェイとハメットの「ハードボイルド」さは、それぞれ知的エリートを対象とするハイカルチャーと、教育程度の低い大衆用のポピュラー・カルチャーから生み出された。しかし二人は同じ時代に生き、第一次大戦後の既成の価値観を失い、ニヒリスティックでモダンな時代精神に反応することで、同じ時期に作り上げた文体が「ハードボイルド」な文体と呼ばれるものになったといえないだろうか。

両者の「ハードボイルド」な文体が同じものである、同じ意味合いを含んでいるという批評にはあまりお目にかかったことはない。しかし通底するものを感じ取っていた人は何人かいるようだ。ハメットが『ブラック・マスク』誌に探偵小説を寄稿し始めたのは1922年である。そしてヘミングウェイの『我らの時代に』がアメリカで出版されたのは1925年である。ハメットがヘミングウェイのまねをした、パルプ・ライターだとは言えないだろう。この二人は共に大学へ行くことなく、既成の価値観に取り込まれることなく、独自に戦後のバリと悪徳警官や犯罪者が横行する無法の町であったサンフランシスコで貧乏生活をしながら、暴力や死によって支配された空虚な世界に、孤独に生きる男の世界観をあらわす「ハードボイルド」な文体にたどり着いたとは言えないのだろうか。

1930年前後になると、異なる知的風土で創作をしていた二人の作家は合流することになる。『ブラック・マスク』誌に連載したハメットの作品『デイン家の呪い』*The Daine Curse*は1929年に、『マルタの鷹』は1930年に、クノップ社から刊行された。特に後者は読者や批評家から注目され、最高のアメリカ探偵小説と賞賛された。これにより彼の文体はヘミングウェイの文体と並ぶか、それ以上だと評判を取った。当時の批評のうち一つをあげておこう。

ハメット氏が現れるまで、アメリカの探偵小説を英国調の優れた作品の物真似としかうけとめてこなかった。・・・ヘミングウェイ、『リト

ヘミングウェイとハメット、二人のハードボイルド作家

ル・シーザー』、『鉄の男』を書いたバーネット、もう一人のヘミングウェイの弟子ともいえるモーリー・キャラハン、ボクシング小説のリング・ラドナーなどのみごとな混合物を想定すれば、ハメット氏の文体と技法がかなりよくつかめるのではないかと思う。ハメット氏は言いたいことを明確に打ち出している。いかなる現代作家よりも決然と、アメリカ語の進展に新たな道を切り開く刺激剤たらんと望んでいる。¹⁶

こうして一介のバルブ作家から、一流作家としての名声を得ると、映画産業とも脚本家、原作者として結びつき大きな富を手にする。

1933年に創刊される『エスクワイア』創刊号では、ヘミングウェイとハメットの作品が同時掲載された。男性向けファッション雑誌を改訂したのが『エスクワイア』誌であった。この雑誌創刊は、フランクリン・ローズベルトによるニューディール政策が施行され（1933年）、「消費者」が時代を動かす力となり表舞台に登場する時期と重なる。この「新たなレジャーの進歩に捧げられた雑誌」¹⁷は、知的エリートと大衆層双方に受け入れられた。長谷川裕一はこの現象を、

以前ははっきりと二分されていたハイブラウとロウブラウとを絶妙に混合することにより読者層を拡大し、結果的に新たな自己を新たな規範によって再構築しようともくろむ男性読者の目の前に様々な魅力的な規範を提示した。¹⁸

と推測する。

ハイブラウ、ロウブラウという異なる出自を持ち、ともに男性的な「ハードボイルド」な文体を創造した二人の作家は、30年代という消費時代には文化的に同じ枠組みへと取り込まれたと言える。

1930年の時点では、「ハードボイルド」という表現がまだなにを指しているか明確ではなかった。しかし『エスクワイア』誌が二人の原稿を創刊号に掲載したことは、二人の作家の文体間に、時代を表現する何らかの繋がりが存在することに、人々は気がつき始めたことを示唆するといえる。

まとめ

本論ではヘミングウェイとハメットのどちらか一方を「ハードボイルド」な文体の祖であると言うつもりはない。同時代に生きた二人の文体には通底するものが確かにあったと言いたいのだ。30年代以降、ヘミングウェイは通俗的雑誌『エスクワイア』に寄稿し続けた。その姿勢に政治や世界情勢とは距離を置いて、くだらない記事を書いて、エリートではない大衆におもねっていると見られ、批評家から非難を受けた。しかし一度はこの大衆におもねた作家が、1954年に『老人と海』でピューリッツァー賞とノーベル賞を受賞すると、再び批評家はヘミングウェイを高級な作家という目で見えるようになったのだ。文化的に高い地位に引き上げられたヘミングウェイと、ハメットの居場所は再び違うものとなってしまった。そして「ハードボイルド」という形容詞は、より低級な探偵小説やその作家たちに冠されることがもっぱらとなり、ヘミングウェイの文体との間には一線が引かれたかのような現状がある。

Notes

1 レスリー・A・フィードラー、(井上謙治、徳永暢三訳、)『終わりを待ちながら』新潮出版社、1989年、27ページ。

2 島村法夫「変貌する1930年代のヘミングウェイ—停滞、あるいは饒舌という自己防御」『ユリカ』1999年8月号。

3 ガートルード・スタイン(落石八月月訳)『みんなの自伝』、マガジンハウス、1993年8ページ。

4 ダイアン・ジョンソン、(小鷹信光訳)『ダシル・ハメットの生涯』、早川書房、1986年、233ページ

5 「(スタインは)ジェイムズの心理学を学びまた自ら意識の流動性と知覚・思考・感情に対する記憶の重要性とを研究して知ったのが、反復が個人のアイデンティティと経験の本質であるということ。この反復は単なる繰り返しでなくて強調(insistence)における推移をもつ反復であって、それはジェイムズの言う生の意志にあたり同時にパーソナリティのリズム(rhythm of a personality)を表す。こういう反復の連続によって延長された現在(prolonged present)が持続する現在(continuous present)になる。文学的には映画のフィルムのような

文章を作り、作品からストーリーを排除し、記憶を介在せずに書くことであった。」と中島顕治は『ヘミングウェイの考え方と生き方』弓書房、1983年、72ページでまとめている。

6 ハンフリー・カーペンター、(森乾訳)『失われた世代、バリの日々—1920年代の芸術家達』、平凡社、1995年、128ページ。

7 「ヴォーティシズム」エズラ・パウンド、(新倉俊一訳)、『世界の詩論』(窪田般彌、新倉俊一訳)、青土社、1994年、248ページと251ページに所蔵

8 Earnest Hemingway, *Big Two-Hearted River: II* (New York: Simon & Shuster, 1995)p. 231-32

9 レスリー・A・フィードラー、13ページ。

10 Buffalo Bill(1846-1917)陸軍で斥候を務め名をあげる。鉄道がカンザスから西へのびるとき、労働者にバッファローの肉を供給したことで、この名がついた。後にBuffalo Bill's Wild West Showを組織し全米、ヨーロッパを巡業する。

Kit Carson(1809-1868)辺境開拓者として西部各地を探検した。西部発展の功労者の一人で、英雄と見なされた。インディアン狩りに熱心であったが、彼ら

を公平に扱いました。

11 Raymond Chandler, "The Simple Art of Murder", Chandler: Later Novels & Other Writings (New York: Library of America, 1995), p. 989.

12 野崎六助、『北米探偵小説論』、河出書房新社、1998年、122ページ

13 A. ハウザー (高橋義孝訳)『芸術と文学の社会史』1968年、平凡社。これは野崎六助、『北米探偵小説論』123ページに引用。

14 ウィリアム・F・ノーラン、23ページ

15 Dashiell Hammett, *The Maltese Falcon* (New York: First Vintage Books, 1992), p. 11.

16 ウィリアム・カーティイス「タウン・アンド・カントリー」、ダイアン・ジョンソン『ダシール・ハメットの生涯』150-51ページ所蔵。

17 Arnold Gingrich, *Nothing but People: The Early Days at Wsquire—A Personal History 1928-1958* (New York: Crown, 1971), p. 103. 長谷川裕一「ヘミングウェイとエスクァイア『男性消費者雑誌』という弁証法、そして1930年代」、『ユリイカ』青土社(1999)8月号に引用。

18 長谷川裕一、176ページ。

(受理 平成12年3月18日)